



松本子どもまつり参加

晴れ渡った青空の下、五月三日にアルプス公園で恒例の第四十六回子どもまつりが開催されました。今年、内田地区の子どもたちは、内田ササラ踊り保存会実行会の皆さんと一緒にステージに立ち、松本市重要無形民俗文化財の内田ササラ踊りを披露することができました。近年は、松本市内の中学校が学校を上げて



平成 28 年 7 月 1 日現在

世帯数	968 戸
人口	2,433 人
男	1,217 人
女	1,216 人

子どもまつりに参加しています。明善中学校は、ストローを使ったオモチャを小学生相手に一緒に作るブースを出店していました。明善中学校生徒会の年間目標の四本柱の一つに、「交流」を掲げています。ここ数年は、地元地域行事に積極的に参加する姿勢は素敵だな、と感心しております。その明善中学校の生徒会や JRC 委員会の中の「内田つ子」たちがステージに駆けつけて下さいました。おかげで今年は、小学生の参加に加えて総勢二十一名の皆さんにご参加いただきました。手慣れた手付きでササラを鳴らす子どもたち、ササラ踊り保存会実行会の皆さんによる、太鼓あり、三味線あり、生唄ありの素敵なステージでの演奏をご覧いただいた皆さんには、存分にその魅力を味わって貰えたことと思います。移動バスの手配をはじめと

塩の道を歩く

絶好のハイキング日和となった五月二十八日、内田公民館主催の「千国街道・塩の道を歩く」という企画に参加した。小谷村の牛方宿・千国の庄史料館と番所・小谷村郷土館の三つの資料館を巡る千国越えコースは、アップダウンがあり、所要時間は往路でも三時間を越えるということ

で、少し不安を感じながらの参加であった。歩き始めは、なだらかな高原の道が続く、北アルプスの白馬三山、木々や山野草の説明に耳を傾け、お互いに話をしながらの余裕の歩きだった。さすがに峠道はきつ、足をとられない様一步一步慎重に歩を進めたが、所要所での説明は興味深かった。

塩の道は糸魚川から松本城下を結ぶ街道で、信州側からは麻や和紙・綿・大豆などが運ばれ、越後からは塩や海産

物、ご支援いただいた町会の皆様から感謝申しあげます。これからもこの素敵な発表の場が続くことを願っております。

内田子ども会育成会会長

一ノ瀬 修一



物が運ばれる当時のくらしの中で重要な道だった。

山坂の続く千国街道での旅や物資の輸送は、歩荷という人の背か牛馬の背に頼るほかに、山道はひずめが割れていて踏んばりの効く牛が有利で、山中で狼などに襲われた時も立ち向かっていく力強さがあり、牛方の頼りになったこの話にはなるほどと納得した。

牛方は雪のない季節、歩荷は雪が降り始めて約六か月間が出番で、牛方は一人で六頭もの牛をあやつり、歩荷は塩一俵を背負って数人で雪の山越えをしたそうだ。

近年まで「牛方宿」の当主であったガイドの千国さんによると、スクールバスが使われる様になるまでは、小中学生も集落の大人達が踏み固めてくれた雪の峠道を歩いて通

学していたとの事。遅しさと助け合う姿に感動した。

「牛方宿」千国番所・史料館には当時の建物や道具などがそのまま保存されていて、昔の暮らしぶりや様子に思いをはせる事ができた。

「小谷村郷土館」には日本最古の恐竜の足跡の化石や、縄文から江戸時代までの歴史を展示解説しており、村の長い歴史を知る事ができた。

個人ではなかなか歩く事がなかったであろうこのコースを体験でき、満足の一日だった。帰りのバスは心地良い疲労に襲われウトウトしたが、休憩する道の駅に美味しいソフトクリームがあるとの運転手さんの案内に疲れも飛んだ。美味しいおまけ付の楽しい旅だった。

二町会 福寛



人権講座

岡谷蚕糸博物館
原田泰治美術館

六月十七日、人権視察研修に参加させていただき、岡谷蚕糸博物館に行くことができて感謝しています。前回も塩の道、千国街道を楽しく歩き、往時の文化、歴史に触れることができました(歩荷と牛方)。一人塩一俵を背負い、数人で雪の山越えをしたのが十五歳から「作間稼ぎ」でした。又岡谷での製糸業を支えた工女さんは、十三歳から二十七歳までが多く、生糸の輸出高はトップで、工女さん無くしては生糸の生産はあり得なかったのです。どちらも明治から昭和の時代です。私も、あ、野麦峠の映画をテレビで観て、病気が原因で飛騨高山へ帰る途中の野麦峠で亡くなるというストーリーを知っていました。が、博物館館長の講演を聴いて、岡谷での製糸業のイメージが少し変わりました。人それぞれどんな捉え方をするか、感じるかだと思います。

二年前に富岡製糸に見学に行き、昼は働いて夜は勉強、稽古といった生活を思い出して、工女さんの真の姿が感じられました。又その時代の就業時間が現代の礎になっています。話を聞いて、話に出てきた今年九十六歳になる元工女さんの日頃の自慢は、製糸工場の高給待遇の思い出です。自分は器用でとても稼いだという話をするのが大好きです。その話をする時がいきいきとしている、という話を聞き、困難を乗り越えてこられた方なんだと思いました。

又保育園の児童も見学に来ていて、廊下ですれ違うことができ、より身近な施設としたい、製糸業の発展と歴史を感じ取ることができました。

昼食後、下社秋宮に参拝、一之柱、二之柱に祈願し、次の原田泰治美術館を見学、原田先生が描く日本のまつりの期間中で、祭り、踊り、獅子舞、人々の暮らしを題材に、人を中心に描く素晴らしい作品企画展でした。

参加者十八人のそれぞれの心に響く一日でした。

七町会 三村 義博



内田史跡めぐり

今年も六月二十五日に行われた、内田史跡めぐりに参加してきました。昨年初めて参加し、南側コースを歩き、内田にこんなにも多くの史跡があるのに驚かされ、自分の住む町の歴史をもっと知りたいと思い、北コースをめぐってきました。

梅雨の晴れ間をぬって、八時半過ぎに公民館をスタートし、清心遺跡、浅田城址を廻って内田のアカマツを目指しました。このアカマツは、地元で「からかさ松」と呼ばれており、太い枝が独特の形で四方に伸び盆栽を思わせます。今回のコースには天然記念木が多く、内田の柿や、内田のケヤキも見ることができ、巨木に成長できるのは、天災が無く土地が肥えているからであり、改めて恵まれた土地柄であることに気付かされました。それゆえ縄文時代から栄えており、平成七年に発掘調査されたエリ穴遺跡からは、二千年もの出土品が発掘され、全国屈指の数であったとのことでした。

コースの最後に、馬場家住宅も見ることができ、丁度七夕人形の飾り付けがされていました。初めて見る、浴衣を着せた着物掛け形式と呼ばれる人形や、紙で作られた人形が、庭が見える廊下に吊るされ、何とも言えない風情を感じることができました。また、建物の造りに目をやると、客間となるザシキは非常に豪華で、鴨居や天井は手が込んだ装飾が施されていますが、生活空間のオエやコザシキは意外に質素で、その差に驚かされました。

二回の史跡めぐりで、内田地域の歴史を知ること、自分の生まれた町は、田畑だけの田舎だと思っていたことが、古くから栄え恵まれた良い土地柄であることを再発見できた良い半日でした。

五町会 横山 周次



つれづれ編集記

我が家には、数年前より春の訪れとともに、ツバメがやって来る。

最初の年は玄関ドアの真上。さすがに泥汚れには洗いや顔になった。しかし、ドアの開閉のせいなのか、まるごと落ちていた(産卵前でよかった)。その後は学習したのか、玄関の軒下に作り直し、無事に雛もかえり巣立っていった。翌年は長男の自由研究にも一役かかってもらった。

近年、街中ではツバメの住環境も変化しているらしく、巣の材料(葦や藁)の入手が困難であったり、建物の形の変化(軒がない)、ツバメに対する人の意識の変化などで非常に住みにくくなっているようだ。

私も最初はこの地域に借家して、なんとなく住み心地の良さを感じ定住することを決めた。我が家に来るツバメたちも同じ感覚があるかはわからない。自然豊かなこの内田の地で生活できることを当たり前と思わず、感謝していきたいと思う。

九町会 百瀬 泰伸

